



『愛のオリンピック』のメダリスト

エリック・リデルの

愛と祈り

オリンピックの話題が出る^{わだいの}とよく流れる^{なが}のが、ロンドン・オリンピックの入場行進^{にゅうじょうこうしん}や表彰式^{ひょうしょうしき}でも使われた、映画『炎のランナー』のテーマソングと、海岸線を走るランナーたちのシーンです。1981年にイギリスで公開され、第54回アカデミー賞を受賞した『炎のランナー』は、イギリスのオリンピック選手団にいた二人の選手の人生を描いています。

主人公のエリック・リデルは、スコットランドの陸上選手で、1924年のパリ・オリンピックで金メダルを獲得し、英国で最も速い男として有名になりました。しかし、エリックが国民的英雄にまでなったのは、金メダルを獲得したからだけではありません。メダリストとなるまでの経緯と、その後の彼の人生が、多くの人にとって予想外の^{よそうがい}ものであり、また感動^{かんとく}を与えたからなのです。私はこの映画を何度か見ますが、ある時、映画には描かれていない彼の晩年^{ばんねん}について知り、とても驚きました。彼の日本への深い愛が、後世に影響を残していることを知ったからです。

エリックは400m走で金メダルを獲得しましたが、もともと彼は100m走、200m走を専門とし、400m走に出る計画はしていませんでした。ところが、オリンピックの数か月前になって、100m走の予選が日曜日に行われることを知ったエリックは、100m走を断念し、代わりに別の曜日に行われる400m走に出ることにしたのです。

安息日である日曜日には競技をしないというのが、彼のクリスチャンとしての信念^{しんねん}だったからです

彼は、オリンピック委員会の要人や皇太子から、祖国のため出場するよう命じられていましたが、国家の名誉のためよりも、神の栄光のために走るという彼の選択は、新聞でも大きく報道され、国中にセンセーションを巻き起こしました。

エリックは400m走に向けて猛練習を始めましたが、誰も金メダルは予想していませんでした。この種目は初出場であり、一番外側のコースを走るという不利な条件だったからです。しかし予想に反し、エリックは47.6秒という世界新記録を出して金メダルを獲得しました。

ところで、エリックはどうしてそれほど安息日にこだわったのでしょうか。エリックは宣教師として中国で暮らす両親のもとに生まれ、両親が子どもたちを母国の学校に通わせることにしたため、5歳の時から親元を離れて暮らし、親に会えるのは年に数回だけだったそうです。しかし、両親によって蒔かれた信仰の種は、エリックの心に深く根を下ろしました。安息日の厳守についてはクリスチャンの間でも意見が分かれていますが、大切なのは、エリックが自らの信念と個人的確信を貫いたということです。

さて、金メダルを獲得し、大学を卒業したエリックは、やはり自らの確信にそって、スポーツ界に留まるかわりに宣教師となることを選びました。そして、中国に渡って神の愛を伝えることに一生を捧げることを決意したのです。

エリックはカナダ人の妻を迎え、三人の娘も授かりました。ところが、1931年に満州事変が勃発し、中

国は外国人にとって危険な場所となっていました。本国からは中国を出るようという退避勧告も出されましたが、エリックは妻と娘たちだけをカナダに帰国させ、自分は中国に残ることにしました。

その後、1943年、エリックは日本軍によって山東省の収容所に抑留され、1945年には脳腫瘍を患って43歳の若さで天に召されたのでした。それは終戦も間近で、もうすぐ家族と再会できるという時でした。実は、エリックには一度、釈放される可能性があったのですが、収容所内に妊婦がいることを知った彼は、自分の代わりにその女性を釈放させたのです。

収容所にいながらも、彼の影響は外へと広がっていきました。収容所でエリックは、戦争で親と離れ離れになってしまった子どもや若者たちに聖書のお話を聞かせ、彼らの友となり、父親のような存在となりました。

そんなある日のこと、一つの議論が持ち上がりました。聖書にある「汝の敵を愛せよ」というイエスの教えは、ただの理想なのか、それとも実行すべき現実的な教えなのかという議論です。若者たちは、「そんなのは理想に過ぎない。日本兵を愛することなんかできるはずない」と主張しました。日本兵による中国人への仕打ちはむごいもので、毎日のように見るに耐えない残酷な光景を目にし、日本人に対する憤りや憎しみを募らせていたからです。

そんな中に、イギリス人宣教師の子で当時高校生だったスティーブン・メティカフという青年がいました。メティカフも、「敵を愛しなさい」という言葉に反感を覚え、日本兵など愛せるはずがないと感じていました。するとエリックが、こう話したのです。

「私もそう感じたが、聖書には、『迫害する者のために祈りなさい』とある。ぼくたちは愛する者のためなら、頼まれなくても時間を費やして祈るが、イエスは、愛することのできないような者のために祈れと言われた。だから、君たちも日本人のために祈ってごらん。人を憎むと、自分中心の人間になる。でも祈るなら、神中心の人間になるんだ。神が愛している人を、憎んではいけない。祈りは、君たちの姿勢を変えるんだ。」

そしてエリックは、説教するだけではなく、自らも毎朝15分早く起きて、日本の国と日本人のために祈

りました。そんなエリックの姿に、少年たちの心は少しずつ変わっていきました。メティカフも、エリックをクリスチャンとして、またスポーツマンとして尊敬していたため、彼の言う通り日本兵のために祈り始めました。

しかし、祈っても祈っても、日本兵の振る舞いは変わりません。

ところが、メティカフの心は変わっていったのです。以前は日本兵には憎しみしか感じなかったのに、次第にこんな風に思うようになりました。

「これが、戦争というものなんだ。兵士たちは、死に慣れっこになり、命の価値が分からなくなっている。それに彼らは、人間が神に造られた大切な存在であることも知らない……。だから、あんなことをしてしまうんだ。」

そして、一日も早く、日本兵が神様の愛と命の大切さに気付くことを願うようになったのです。エリックが収容所の中で天に召された時、メティカフはエリックの棺を担ぎながらこう決意しました。「もし生きてこの収容所を出られる日がきたら、僕は宣教師になって日本に行きます。」

実際スティーブン・メティカフは、第二次世界大戦後に日本に来て、38年間、東北や北海道で神の愛と平和を宣べ伝えました。彼が日本に来る時に乗った船には、朝鮮戦争に向かうイギリス兵もたくさんいましたが、その兵士たちに、彼はこんな説教をしたそうです。

「あなた方は平和のためと、銃を持って韓国に向かっていますが、私は聖書を持って日本に向かいます。戦争が終わっても、日本にはまだ平和が訪れていないからです。私は聖書を教えます。イエス・キリストこそが、平和の君だからです。」

このように、エリックのゆるしのメッセージを聞き、その祈りの姿を見た青年たちは、後に、日本やその他の国々に出て行き、愛によって世界を変えていったのです。エリック自身は一度も日本の地を踏んだことはありませんが、彼の祈りは日本の多くの人々の心にまで届いたのです。彼は地上のオリンピックで金メダルを獲得しただけでなく、人生という『愛のオリンピック』でのメダルを、天国で受け取っているに違いないありません。

小中高生勉強、パソコン教室、アコースティックギター教室もお問い合わせください。(^^)／

土山みことばキリスト教会(単立プロテスタントキリスト教会)

- ・主日礼拝 日曜日 午前10:30～(昼食あり)
- ・聖書の学び 水曜日 午後7:00～(時間相談)

〒674-0094 明石市二見町西二見1993-7(1階)(JR土山駅 南東へ徒歩6分、田中医院さんのとなりです) 電話:079-422-4557 メール:tsuchiya.gospel.christ.church@gmail.com

